

ジョレス・メドウェーシエフ
ロイ・メドウェーシエフ著

回想 1925-2010

双子のメドウェーシエフ年代に執筆されたものが収録されている。彼らの人格形成に決定的に影響を与えてきたのが、一九三七年に「ハリン主義者」として逮捕された哲学者の父である。本書は、この父親の思い出と戦時下の生活の回想から始まる。

ロイは、父の影響の下、母の心配をよそわれ、スターリン主義の解明をライフワークとし、邦進するが、訳書も多数出ている。「人民の敵」連立国家安全委員会の常時監視下にあった。

本書はメドウェーシエフ兄弟の人生回想録であり、一九六〇年代から二〇〇〇



A5判・346頁・4410円
現代思潮新社
978-4-329-00485-7

なる。いずれもスターリン晩年だが、彼らの転機は、その後のスターリン批判とともにやって来る。本書は六〇年代、七〇年代の多くの知識人や作家、芸術家、科学者との交流の回想に費やされているが、そこから昇えてくるのは、抑圧的な権力をそれに対抗する知識人という単純な図式ではなく、知識人内部の様々な確執や意見対立などである。それらにより、自分

「異論派」とは何か

今なお興味をかきたてる問題

波谷 謙次郎

それゆえ体制の擁護者となり、異論派の伝統は、後にゴルバチョフのベレストロイカ・グラスノスチを支持するようになり、自分の見解を新聞や雑誌で発表できるようになったが、それによって、異論派とは何か、それらに続くなら、社会における異論派とは何か、それらに置き換えて、新たな異論派が出現する可能性はあるかという問いを発している。それはあり得るだけでなく、「人権擁護」の観点から、異論派の存在意義も、その存在が多種であるにせよ、共産党政権の転覆を目指すのではなく（純然たる反体制派ではなく）、社会主義の理念を保持しつつ、ソビエト憲法の民主的規範に訴えかけるなど、法戦術を採用していたそれゆえ例えはソルジェニツィンからみればロイは社会主義の理念の擁護者で、

華派（民主派）は弱体化し、共産党から権力を奪おうとしていた。そして異論派の影響力はソ連解体後にはなくなったという。以上のようにロイは回顧する。

異論派の果たした役割や影響力は本書では決して過大評価されることはない。ソ連時代のような弾圧や投獄にあうわけではなく、精神病院や矯正施設に送致されたり、国外追放に処せられたりするわけでもないが、政権側や野党は、その存在を気にもとめておらず、有力紙も軽蔑し、西側のメディアもまったく注目していないという。このように、現代の異論派はソ連時代とは異なった意味で新たな困難に直面している。

また、本書日本語版の補遺としてジョレスによる日本論が所収されており、北方領土（南クリル諸島）問題に関する興味深い記述もある。ロシアの知識人も、皆ロシアの国益を代弁しているわけではなく、「異論」もあるようだ。（佐々木洋監訳・天野尚樹訳）（じぶんや・けんじろう氏）神戸大学学教授・ロシア法専攻

★ジョレス・メドウェーシエフは生化学・加齢学・政治史研究者。著書に「誰が狂人か」（ロイとの共著）、「ワラルの核惨事」など。一九五五年生。

★ロイ・メドウェーシエフは歴史家・政治家。著書に「社会主義的民主主義—一九一七年のロシア革命」など。一九二五年生。